

Urban Design Lab. Magazine

2016.12.28 vol.248 特集号



幾多の月日を重ねて今

S U C C E S S O R S ' S U C C E S S

回想—7年の月日を想う p.2
かつての「同志」の挑戦と展望 p.4
まちなかの足跡を探って p.12

東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：黒本剛史
編集委員：王誠凱 中井雄太
神谷安里沙 田中雄大
中村慎吾 松田季詩子



回想 — 7年の月日を想う

Remember Prof. Kitazawa on His Seventh Death Anniversary.

北沢猛先生が亡くなってから
今月でちょうど7年が経過した。

私たちは北沢先生を知らない。
しかし、先生が築いてきたものは
7年の歳月のなかで大きく成長し、
私たちの世代にも生き続けている。

北沢先生が遺したものは何だったのか？
そして今どのような形で実を結んでいるのか？
それを探るべく、私たちはまちづくりの現場へ赴いた。

北沢先生特集第4弾。
リレーインタビューと取材旅行から北沢先生に迫る。

目次

▶ かつての「同志」の挑戦と展望 p.4
— 信時正人氏インタビュー —

▶ まちなかの足跡を探って p.12
— 喜多方から見えてくるもの —



信時 正人氏

東京大学都市工学科 16 回生。
1981 年三菱商事入社、
2002～2005 年に財 2005 年日本国際博覧会協会（政府出展事業 企画・催事室長）を経て、
2006 年 1 月東京大学大学院新領域創成科学研究科特任教授。
初代 UDCK 事務局総長を務める。
2007 年 4 月～2016 年 3 月横浜市に入庁後、都市経営局都市経営戦略担当理事、
温暖化対策統括本部長を経て、横浜市温暖化対策統括本部 環境未来都市推進担当理事。
2016 年 4 月エックス都市研究所理事、横浜市参与。東大大学院都市持続再生学コース（まちづくり大学院）非常勤講師、横浜国大客員教授。

かつての「同志」の挑戦と展望 —信時正人氏インタビュー—

His Ally Overlooks for the Future —The Interview with Mr. Masato NOBUTOKI

UDCK、UDCY という 2 つのアーバンデザインセンターを北沢先生と共に立ち上げ、つい先日 UDC initiative を設立された信時氏。商社出身の感覚を根幹に多くの職を歴任し、「既存の枠組みの打破が必要だ」と語る氏の取り組みと展望、そして北沢先生との交流に迫る。（聞き手：M1 田中・中村・松田、編集：M1 松田）

▶北沢先生、UDCK との出会い

- 北沢先生との出会いを教えてください。

横浜市都市デザイン室長でいらっしやっ、その後、東大に移った方ということで、お名前は知っていましたが、初めてお会いしたのは三菱商事時代の 2000 年前後ですね。TX ができて新しい駅ができるということで、その駅周辺のまちづくりについて民間企業として勉強会をしていた時に東大の先生方ともいろいろと情報交換、意見交換をしたことがありました。東大が初めてまちづくりに関わるかもしれない、ということで、三井不動産だけでなく三菱商事、他の企業も開発に向けて動いていた頃でした。その時は既に新領域ができていたから、そこの先生方と、まちづくりや、未来の大学と街のかかわり方についての勉強会だったんですね。そのメンバーの 1 人として北沢先生が 1,2 回出てきたことがあって、そこで名刺交換をしたのが最初。だけどその時は話も出来ず、お互

い大勢の中の 1 人でした。

実際にお話をしたのは私が大学に移った 2006 年です。柏の開発はその時点で三井不動産がやることになっていた。僕は三菱商事を 2002 年に辞めまして、愛・地球博の日本館の事務局長や政府出展の企画・催事室長などを 3 年半ほど務めたんですね。それが終わったときに、かつて、まちづくりの勉強会の東大側の中心だった大矢禎一先生から、東大の内部の人間としてまちづくりに関わらないかとオファーがあり、まさか僕が、と思いましたが、非常に興味があったので、謹んでお受けしました。当時の小宮山総長は柏に思い入れがあったようで、**柏の葉国際キャンパスタウン構想¹⁾**を進め、地域との密着・連携に初めてトライしていたんですね。そこでビジネス感覚と国際感覚、都市工出身者としての感覚などを買われたのかな、僕がその担当の特任教授になったんです。

学内の色んな会議に出る中で、何かの会議で北沢先生と再会しました。初めて同じテーブル

について、「聞いているよ、お前後輩だろ」くらいで 1 回目はあっさり終わった。でも 2 回目に、「信時さんさあ、ちょっと手伝ってくれないかなあ」と言われた。それが一緒に UDCK を立ち上げることになったきっかけです。

- その間に、北沢先生の構想のなかに信時さんが入ったということですね。

ここの構想は、大学の人だけでは無理だと思われたんでしょうね。運営もそうだし、経営などの感覚的なものから、ネットワーク作りなど、民間企業感覚を持った人がいなきゃだめだということだったのかな。

で、僕は僕で、最初は UDCK だけの担当ではなくていろんな先生方の研究と企業を結び付けるなど、インキュベーションの仕事を請け負っていたけど、UDCK については、誘われる前から話を聞いていて、内心すごく関心があった。僕はもともと人生の中で都市のマネジメントとか経営をやりたい人間で、商社に行ったのも、1 つはそのためなんです。世界に



(左) 初代 UDCK(2006.11~2010)
(上) K サロンの様子。UDCK サイトによると「K」とは「柏の K か北沢先生の K か、特に決まっていない」そうだ。特定の目的を持たず、門戸を誰にでも開いている

は City manager 制度²⁾ というのがありますが、僕はこれになりたかった。メイヤーではなく市の「経営者」であり、議会がアサインして、経営手腕がなくては首になる。学生時代、日本でもこんな仕事はあるべきだろうけど、日本の状況から言って無理だと思った。では、まちづくりを経営体として受け入れうる企業体はどこかと考えると、ある地域の不動産開発や、建設だけではなくて、産品売買や各種サービスなど、いろんな面にビジネスの根を張っていて、国際展開もあり、そこで利益を出すことのできる商社だったんですね。入社してからも全く理解されなかったが、中長期的には都市経営を仕事としてやりたいとずっと主張していた。

まちの経営手法の 1 つに事業者が地域の経営体となる BID 制度がありますが、これは色んなやり方があるけど、例えば土地を持っている割合に従ってお金を出して、それを第二の税金のような形で自治体に抛出し、このお金を自治体がまた事業者が作った社団等に戻して地域の経営を任せます。役所に任せたら十把一絡げに同じようになるのを、BID 内ではエリアの価値を上げるために集中投資をしてもいい。イベントで儲けても構わないし、イベントだけじゃなく種々のビジネスをしかけていいんです。柏の葉では既に三井さんが 1 人 BID みたいなもので、街を運営していこうとされています。

そういったエリアのマネジメントができそうなものとして、UDCK の可能性を感じていた

ので、北沢先生が「一緒にやらない？」と言ってくれた時には、僕としてはこれには乗るしかない、と思いました。

でも、びっくりしたのは、その時点で三井さんはもちろん、千葉県で堂本知事（当時）とか、柏市の本田市長（当時）とかにまで北沢先生はご理解を得るため話をしてたんですね。これがあの先生のすごいところで、商社マン的な交渉までしっかりやっていたわけ。本田市長は都市工の先輩でもあったが、堂本知事にも、いろいろ手を尽くしたんでしょうね。詳しくは分からないけれど。

柏市が内閣府の知の拠点再生事業というものに手を挙げる、というところでも UDCK を発表するところでも私はご協力しましたが、北沢先生が僕に頼んだのは UDCK の設立への実施作業にあたって協力しろということだったんですね。色々試練もありましたが、面白いし、思い切ってやりました。

▶「オープンな場」だった UDCK

- 当時の UDCK はどんな雰囲気でしたか？
もう少し汚くて、しかも窓が大きいから机で作業していたりすると周囲からも丸見えです。研究室のような雰囲気、大学院生たちの作業の場でもあったんですね。UDC の理念を達成するためには産、官、学、市民と異種異能な人を集める必要がありましたが、十分ではないがある程度成功していたようにも思います。らら

ぽーとに来た子連れ夫婦がフラッと入ってきて院生のプレゼンを聞いていたり、当時から今も続く K サロンには、特段のイベントでもないがワイワイ集まってくれたりもしました。

また、大学院生がいたために、変な話けど若い人と話したい地元の人たちもいて、そういう方もやって来てくれたかなと思います。しかもそこで単によま話をするだけではなくて、院生の話を聞いて「協力してあげようか」となる。「農業もまちづくりに関係があって」と話すと、「じゃあ農協の誰を紹介してやるよ」という地元のお父さんがいたり。動機はどうあれちゃんと協力してくれるし、東大の学生の研究に協力しているんだ、と、ご自身のことも誇りに感じられてうれしいのではなかったでしょうか。単なる話相手じゃなく、価値のあることと思って来てくださっていたのではないかと思います。

UDCK をオープンな場にすきかけとして K サロンを企画しましたが、それだけではなく、普段から常に誰かが入ってきて、フリーで相談をしている感じの、密接なコミュニケーションの空間となりました。

- 設立当時の UDCK が果たした役割とは何ですか？

地域住民への「教育・啓発」が、1 つの大事な役割です。縮尺 1/1000 の模型があって、見ると自分の家の位置までだいたいわかる。あるときふらっと入ってきたおじさん（工場の

1) 柏の葉国際キャンパスタウン構想：2006 年度から千葉県、柏市、千葉大、東大の四者によって検討され、2008 年 3 月に策定された構想で、柏の葉エリアにおいて公・民・学の連携による国際学術都市づくりに向けて重点的に学術研究資源の活用と国際化を推進するため、具体的な目標と方針を定めたもの。UDCK（2006 年 11 月開設）もこの連携のコーディネイトを担う要として、構想の中に組み込まれている。

2) City manager 制度：20 世紀初頭、行政サービスの拡充を目指してアメリカにて採用された制度。議会が採用し、専門家として様々な行政サービスの提供、日常的な自治体組織の運営に当たる。現在は全米の市町村の 67-8% が City manager 制度を採用するのみならず、巨大都市でも積極的に採用される。人口上位 10 都市のうち、第 2 位の Los Angeles 市を筆頭に 7 市が導入している。「アメリカの City manager は個人事業主であって、各自治体でキャリアを積み、段々と大きな自治体に移っていく。」(信時氏)



——都市を作ったあと、その経営をUDCがコントロールできるのではないか。

オーナー)が、未開通の都市計画道路を指して、「間に俺の工場あるけど、どうなるの?」と聞かれたことがありました。僕が「繋がるんじゃないですか?」と言うとびっくりして、「え?いつ?」「わかりませんが、5,6年先じゃないですか。市に聞いてみますか」「そうか、どかなきゃいけないの?」「かもしれないね」という会話をしたこともあった。役所が今までのように地主さんの家に直接お願いに行っても追い返されて終わるようなことを、自然と、熱くならず考えることができるし、模型があると街がどうなるかも視覚的に伝えられる。

さらには、まちづくりマネジメントの1つとして、産官学と市民それぞれにとって利益と意味のあるフラットな話し合いの場所になれば、という役割。具体的には、柏の葉国際キャンパスタウン構想について住民の方々のご理解・協力を得ることですね。駅前に土地を持たれている三井不動産以外の地権者様に構想をご説明する機会を持ったこともありました。日本では私権が強いから、自分の土地は基本的に何をしても自由。建築基準法、都市計画法、風営法とかを守っていたら何を作ってもいいですね。でも、やはり柏の葉キャンパス駅周辺は国際キャンパスタウン構想に基づきこういうことを考えている、というのをお伝えする機会があってよいだろう、という発想で、地権者、住民の皆さんとも将来構想を共有していくことが

重要だと考えました。

都会の真ん中でも建築について地域住民が反対することがよくありますよね。住民の方々が運動を起こすことになるまで事情を知るのは、ある程度決まってしまうから。しかし、そうなるからではすでに遅いことが多いです。それよりも、ここが目指していたのは、これから開発という段階で、まちづくりについてみんなで話し合おうということ。公民学でのまちづくりはそこがミソです。住民の方々は住むことに関しては“プロ”じゃないですか。だから住んでいるプロの意見を受け入れて、というのは考えようによっては当たり前のこと。

都市を作ったあとと市民が受け入れるかどうか。建物を建てる人は作ったら終わり、少なくともこれまでは経営ということをしていなかった。テナントならどんどん入れ替え、時代に合わせて人の入るものにするとか、住んでいるなら如何に地域を楽しむとか、そういうのは管理ではなくて「うまく回す」経営の範囲ですよ。今まではそういった機構がなかったけれど、UDCなら経営もコントロールできるのではないかと、思ったんです。

-UDCKが地域の方の寄る場所や、地域の方を呼ぶ場になったというのは、ハードを作っただけでの成功ではないと思います。UDCKの組み立てから意識したことはありますか?

やはり大きかったのは、模型というコンテン

ツではないでしょうか。海外にもUDCのようなところは多くあるのですが、こういう場所は、家族連れでの外出の目的地になったりしているんです。UDCKを見にくるきっかけとして、人を寄せるものになってほしかった。

運営の中では、自治体の街づくり系の委員会をはなるべくここでやって頂けるように柏市や千葉県にお話をしている、真ん中に模型があり、必要ならそれを見ながらまちづくりの話し合いをしているという状況づくりを目指しました。

-対して、結果から見えてきたものは?

地元の自治会とかに公民館の代わりのような感じでご利用いただくことができました。絵画展とか、写真展とか。この場所はそれまで何もないところに建設しましたから、潜在的なニーズがあったってことかもしれないですね。

もう1つ、あえて人選をしたわけではないので偉そうには言えませんが、いらっしゃるディレクターさんの人的魅力は外せません。常駐している人が、にこにこ、ほんわかして魅力のある、お話をしたくなる人だというのが重要だったと思いますよ。僕がというわけではなくて、後をついで来てくれた人たちは皆、魅力的な人たちがばかりだったと感じます。僕は「旅館の女将」のような人が必要だね、と良く言っていたんですが、この人に会いたいな、と思わせる魅力のある人が真ん中にいる必要がありますよね。



(左) 柏の葉キャンパス駅周辺。これではまだ東大のサテライトオフィスが見えず、TX沿いの街区も造成中である
(右) 地権者向け説明会で将来構想を説明する北沢先生

▶ UDCYの試み

-信時さんは北沢先生とともにUDCY、その後UDCSEAも作られています、後続のUDCについても伺いたいです。

UDCYは北沢先生と一緒に作った僕にとっては2つ目のUDC。ネットワーク型シンクタンクとっていますが、要するに、決まった拠点がなく、ネットワークだけあるんですね。スポンサーがないからお金もない(笑)。

初めは、横浜にあるハイブローなアート拠点であるBankARTの支配人の方と北沢先生が仲良かったから、BankARTスクールの一環として部屋を貸してもらい、UDCYの前身となるスタジオ、UDSY(ヨコハマアーバンデザインスタジオ)なるものをやり始めたんですよ。隔週で木曜夜に一回集まって、ここに民間企業や、大学の先生、学生達、横浜市役所、建築事務所、アーティストとか、公民学のいるんな人が集った。そして、北沢先生をセンター長として2008年4月にUDCYが成立した。今のYCC(当時はBANKART1929)、馬車道駅の上にある歴史的な三角の建物を使って、僕が司会でオープニングパーティをしました。

当時の中田市長も、阿部副市長もお祝いに来てくれました。でも横浜市としてはUDCYのスポンサーにはなりません。理由としては、横浜はまちづくり系の団体が沢山あるから、行政としては1つだけすくい上げるわけにいかないということだったように思います。特に現役で市中枢にいる面々が在籍していたら、なかなか自治体のお金は出せないですよ。でも市長なんかは我々の話し合い内容に興味を持ってくれましたし、実際に、UDSYの中のエコ戦略チームの提案が、僕のいた温暖化対策統括本部(当時は地球温暖化事業本部)の施策にもかなり影響するなどしています。



UDSYの会合の様子

更に、市の四ヶ年計画が出たのですが、その中に、「海洋都市横浜を目指す」、というコラムがあります。ここで言われている将来の横浜像を実現していくためにも、新しくUDCSEA(ヨコハマ海洋環境みらい都市研究会)を作りました。「港町」というのは演歌の世界だけの話で、普通は港とまちは別々の論理で成り立っているのですが、海のわきに立地しているという特質、有利さを活かしたまちづくりができないか、と前々から考えていたこともあります。また、「うみ協議会」という産官学の組織を持った横浜市自身や、海センターという組織を持っている横浜国立大学とこれから綿密に連携できていけばよいな、と思っています。

-最初にUDCKを北沢先生と立ち上げてから、短いスパンでUDCYに取り掛かられています。短期間のうちにUDCYの作成にこぎつけた理由はありますか?

北沢先生に勧められた、などではないのですが、その後僕が横浜市に転職したとき、北沢先生はちょうど市の参与だったんです。参与はOBかつ、非常勤の取締役のようなもの。当時の中田市長のブレーンの存在でありました。僕は都市経営局の都市経営戦略室の都市経営戦略担当理事という立場で、その組織自体が市長のブレーンの組織。だから、またまた非常に近い距離で仕事をすることになりました。

その年、2007年の夏ごろかな、「信時さん、UDCYも作るよ」と北沢先生から声をかけてもらったんです。もともと北沢先生は横浜でもやりたかったのだと思います。横浜は巨大すぎて一つにまとめるのは大変だし、いろんなまちづくり団体もある。だけど、様々な課題を解決するために公民学のやり方は当然必要になってくるので、UDCKみたいに、地元だけでなく民間企業も仲間に入れたグループを作ろうという構想でした。北沢先生自身は市のOBです

ので、市役所の中には仲間が多いし、大学の先生仲間も大勢いる、というような状況の中で、最初から人脈的には恵まれていたと思います。

-スポンサーの有無が大きな違いだと思いますが、潤沢な資金のあるUDCKに対しYを予算なしで動かせたのはなぜですか?

何かがスタートするという物珍しさに加え、集まったネットワークの中に、やる気のある人がたくさんいたということではないでしょうか?僕は北沢先生から産業界を中心に人を集めるように、民間は任せる、と言われてました。東京電力、東京ガス、パナソニック、三菱地所、三菱重工、など横浜市周辺の思い当たる企業から誘っていったんです。UDCYの前身となるUDSYの研究体制として、都心、郊外、交通、緑地、エコ戦略、5つのチームを作りました。僕はエコ戦略のチームリーダーだったんですけど、他チームは学生とか地元の人が多いなか、僕が自分で声をかけた人が集まってきたから、うちのチームはダークスーツの企業人が多くて、黒い軍団とも呼ばれました。

発足時の予定では全部で25人くらいの予定だったのが、最初から50-60人集まったんです。しかも、回を重ねるごとに増え、最終的には90人近くとなりました。

-つまり口コミで、直接関係がなかった人々もやってきたのでしょうか?

そうですね。役所の方も、声をかけた/かけないに関わらず増えました。役所での会議では、役職的に下の人間がなかなかしゃべれない、みたいな感じもある。ところがUDSYに来たら、みんなよくしゃべる。僕の部署からも係長の女性がきてくれて、見ていると議論をすごくリードしてくれていたんで、それくらい普段もしゃべれば?と言ったんですがね。民間も、よくわからないけどなんか始まっているから参加しなきゃ、みたいな人も、半ば仕事で内容をチェッ



BANKART1929(当時)、UDCYのオープニングパーティでの北沢先生

——分野どうしのマッチングと新しい分野の実現へのサポートは、UDCのような組織がやるべきだと思っています。

くしたいという人もいましたが、意外な人がチームの主力となったりとか、様々で面白かったです。みんな色んな立場でのアイデアを持っているんですよね。そういう人たちの集う場ができたのは魅力だったと思いますよ。

僕のチームから街でミツバチを飼おうというアイデアが出て、みんなで「ハマブンブン」(Hama Boom Boom!)と名付けて、実現に向けて動き出していたときがありました。そのグループの中に、普段は大メーカーでごみ処理プラントの技術をやっている、まちづくりに関係なさそうな人がいましたね。彼が、元町商店街の、いつもお茶をしに行っている喫茶店で、店の人に「この辺でハチを飼えるところないですかね」って相談した。そうしたら店の母さんと娘さんで考えてくれて、その結果、場所を紹介してくれて、元町商店街で、6年前からハチを飼うことになったんですよ。

いまは数万匹を飼育中なんですが、取れるハチミツは年間60-90kgくらいになる。それを地元の霧笛楼という超有名なフランス料理店が買ってくれているんです。あそこのハニーロールは元町産のハチミツを使っているんですよ。その彼は、いまハチミツづくりの人として元町の中でも有名になってきている。実は、その縁がきっかけで喫茶店の娘さんと結婚しちゃって、子供もできて幸せにやっています。活動自体も、地元の元自治会長さんやら、いろんな商店主、地元のデザイナーや弁護士に至るまで、町内会の総出といってもいいくらいになっています。

霧笛楼の社長も本当にサポートしてくれているんですが、霧笛楼には全量の半分を卸していて、残り半分は自力で他の喫茶店とかパン屋とかに売っています。だから元町の中で小さいけれど経済が回っている。作るだけっていうところは沢山あるけど、地域に還元して、地域の人が喜んでいる、までいくとあまり例がないと思います。養蜂技術的にもいろんな経験を経て、自分なりのノウハウもできて、他にも教えられるレベルまで来ているしね。さらに今は、はちみつのみならず地域の植生や気候を反映していることから、横浜市環境創造局の緑生担当の方にも仲間になっていただいたり、研究も視野に入れた多角的な展開を考えています。

-色々なプロジェクトを統括していらっしゃるが、多種多様なプロジェクトにアドバイスする際に配慮することはありますか。

方針を定めるような意味で「統括」するつもりは僕にはない。どうぞ自由に、というスタンスなんです。まちづくりにはいろんな能力の人がいて、やりたいことも多種多様で、僕が全部にプロなわけでも、リーダーシップをとれるわけでもない。ただ、やっていることの情報を俯瞰的に握っている人という意味では統括かもね。俯瞰して、方向さえよければお任せし、必要であれば当然サポートする。やっている人が自主的に、自由にやれることがいいわけです。

-全体を把握する、という戦略は、UDSY/UDCYに最初からあったのですか？

戦略としてはあったわけではないけど、自然にそういうことが必要かなあというのは感じていました。あちこちで何をやっているかを知っていれば、いろんなものをつなぎ合わせる事もできるし、それは必要なことですからね。各々がそれぞれの分野で一生懸命進めていくことが基本だけど、そのうえで、新しい展開や、いろんなヒントをほかの活動から得られるわけです。その辺のサポーターとしての存在も必要ですね。そのようなマッチングと新しい分野の実現へのサポートは、UDCのような組織がやるべきだと思っています。

プロジェクト同士のアライアンスとして、たとえば、上流下流を繋いでいる川という視点から、下流の横浜市と水源地の山梨県道志村の関係についても僕のチームで考えました。企業と同じように自治体同士もこれから特徴を活かしあい、アライアンスを組む時代ではないか、と。人口・金・技術等の都会の持っている要素と、森林・水、きれいな空気・木材等の素材・二酸化炭素吸収、の山村地域、それぞれがお互いに良い点を補い合うんです。実際に横浜市と道志村との連携にはカーボンオフセットなどの具体策などもあって、いろいろと考え、行動してきています。

▶ UDCのプラットフォーム、UDC initiativeの構想

-他の方のインタビューにも、北沢先生もUDCの理念の部分に関しては厳格でなく、自由にやっていいというのが特徴で、だからこそUDCも10年くらい経って柔軟に変わって

るというお話がありました。UDCについての展望をお話いただけますか。

UDCKを筆頭に、いま15か所のUDCがあります。関西にももう1個できそうですよ。大都市から地方まで様々な対象があるけど、それを1つの知にして、情報を統括することが必要なんじゃないかと思ったんですよ。これから自治体や大学が新たにUDCを作ろうとしたとき、もちろんノウハウの棚卸しもしないといけません、我々自身がコンサルにもなれるのではないかと思うのです。更にもっと大事なことは、UDC自身がサステイナブルにならないといけない。そういうプロジェクトを進める主体の必要性を感じ、出口先生やUDCK設立時からのメンバーでUDC initiativeという社団をつい先日、11月22日に設立しました。

-UDC initiativeがUDCのブランドとして機能するという感じでしょうか？

そうそう、UDCのプラットフォームといったほうがいいかな。ほかのUDCの上か下かはわからない。みなさんのサポートをするし、何かあれば協力し、何かで引っ張っていくこともあるかも、という存在。

仕事内容の1つは、さっき言いましたが、新たにUDCをつくる時、自治体や大学へのアドバイザー、コンサルみたいになること。それから、もう1つは「人材づくり」を事業にしようと思っている。各UDCをリードするディレクターさんが必要ですが、まだ人材層が薄いですよ。そういう人材を育成する機関は東大のまちづくり大学院にもありません。最近、エリアマネジメントなどのネットワークが全国にできつつありますが、こういった職能を持つ人間の数は少ない。人材育成は急務ですよ。UDCには現場があるから、OJTで人を受け入れることもできるのではと思います。

-過去のインタビューの中でもUDCへの人員を作るための障壁として、職業とするにあたっての金銭面的な問題が挙げられてきましたが、克服するためにはこれからどのような部分が必要になってくるとお考えですか。

新しい視点の事業と、新しい視点のファイナンスが必要かもしれませんね。

現状、企業、自治体、または大学の補助で成り立っている事例が多いです。だから今後、UDCが自身の価値を持ってリリースできる事業が必要かもしれません。独自のサービス、企

——各地のUDCでそこをリードするディレクター、そうした人々の「人材づくり」を事業にしたい。



画をもって、補助金頼りでなく生きていける方法を考えていきたい。アイデアはあるのですが、今までの金融の世界では、一部例外を除いて、こういうところにお金はあまり回ってこないですよ。とくに企業からは。

今、日本全体を見渡した時に、国や自治体は大きな借金を抱えていて、一番お金を持っているのは企業。しかしなかなか、企業もお金はあるのに投資のマインドが弱いですよ。出したくなる主体がないんだ、というある銀行の人の話を聞いたことがあるのですが、見えていないだけではないかな、と思うのです。クラウドファンディングとかもありますし、CSV³⁾の流れもあります。直接は関係ないかもしれませんが、パリ協定の批准で世界的なお金の流れが変わってくるといわれていますし、実際に変わってきています。少し大きすぎる話になった感がありますが、今までの金の流れを少し変えねばという動きをUDC initiativeも検討して、まちづくりへの新しい金融の流れを作っていくこともできればと考えてます。

CSV (creating shared value) とは、CSRのような単なる寄付ではなくて、価値を創造しあっていくという取り組みです。分かり易い例で言えば、キリンビールは森林にすく「投資」するんです。なぜならキリンの事業の源はビールにしるウィスキーにしる飲み物ですので、きれいな水をサステイナブルにつくらないと成り立たない。結果として山も生きていきます。最近、世界では石炭火力にお金が回らなくなっている話を知っていますか。日本はまだですが、ヨーロッパでは特に、環境にいいものにしか投資しないというのが生まれてきている。お金の

流れがコロッと変わり始めている部分はあって、そういうのに期待をしたい。UDCにその中のどの辺りが回ってくるのかはわかりませんが、これまでの常識だけでは図れないと思います。希望を持ちたいと思います。

▶行政、コンサルの立場から

-UDCのほかに、信時さんの現在の取り組みについてもお聞かせください。横浜市役所に入って9年になるということですが、転職を経験されて行政に入ったのはなぜですか？

一番大きなのは、一度、行政を経験したいということかな。それと、行く先の部署名が、都市経営局、都市経営戦略室、都市経営戦略担当理事で、まさにCity managerの名前だったので。この名前が都市整備局だったら行ってないかもですね(笑)。

当時副市長が4人いたんですけど、助役から副市長にそちらも名称変更したところでした。当時の中田市長としてはそれぞれに責任を持たせたいという思いを込めていて、1人に1つ、4個のプロジェクトを持たせたんです。少子高齢化社会対応、新たな大都市制度対応、地球温暖化対策対応、クリエイティブシティ・創造都市対応、この4つですね。僕は全部の副市長のプロジェクト会議に入りました。都市の経営だから、全てに関わらないと全貌が見えない。本当は市長や副市長がその役割を果たすべきなのかもしれないが、忙しいので、行ったり来たりできたのは僕だけだったです。面白かったです。

-北沢先生も横浜市でしたが、より古い、アーバンデザインを役所がやるという考えがそもそ

もない時代にいらっしゃったわけですよ。

横浜市役所はもう40年以上都市デザイン室というのがあったわけですよ。デザインが色々形だというのは日本くらいのもので、欧米ではライフそのものを指す非常に広いコンセプトなんです。昔の都市デザイン室もそういう発想のもとに、ハードのデザインとはいいいながら、その背景や戦略も含めてやっていたのではないかと思います。北沢先生が現役でいらしたころは非常に広範なことをやっていて、都市デザイン室がOKしないと何も進まないという時代だったようですよ。

僕のいた温暖化対策統括本部は、市の建制順(局の序列のようなもの)の一番上にあって、温暖化対策を切り口に全市的な広範な意識でやっています。

-そちらで都市デザインをやっている、ということですか。

いわゆる都市デザインではないですが、温暖化対策のために社会や生活をどうデザインしていくのか、ということです。例えば電気自動車(EV)について。EVが社会に浸透するだけで、まったく今までと違うライフスタイルが生まれてくる。車庫がいらず、家電と同じように家の中に入れられるかもしれない。すると、そのまま車椅子やベッドになってしまうとか、EVがAVシステムに変貌するとか、自動車と住宅のデザインのコラボレーションが本当に必要になってくるのではないかと、思うのです。日産さんに言わせると、EVはそのものが1.6トンのスマホだ、と。だから、ただ街を走らせるだけじゃ意味がなく、「EVがある街はどんな街か」を考えなきゃいけないわけです。自動運転車も

3)CSV: CSV (creating shared value)、CSR (corporate social responsibility)。共通価値の創造と訳される。CSVは後者に代わる概念として2011年にマイケル・E・ポーターにより提唱された。

意外に早く普通に登場する時代が来るようにも思いますが、技術的な可能性、生活の可能性の両面から、今あるものの延長線には未来の生活＝まちは、もうないと思っている。

そういったことを考えると現状の法規制がネックになっていくのだろうな、と思います。新しい技術の社会実装には、技術そのものの進展と新しい製品づくり、ユーザーとしての市民も一緒に参加して使用方法を考えていかなくてはならないし、更に、国や自治体も参加して今の法規制で良いのかどうか、と見極めないといけない。UDCK が頑張っている、セグウェイの世界もそうですね。UDC という存在が、公民学のコラボレーションを生んでいく中で、こうした技術の社会実装への拠点にもなる可能性がありますね。社会のデザインをするのもUDC の役割だと思います。

- 現在在籍しておられるエクス都市研究所でやられていることも、技術の社会反映による都市のデザインということと関係していますか？

ここでは、技術も含めた都市全体の戦略をデザインする中でコンサルの新しい関わり方を模索しようとしています。エクスは都市工の3回生が起業した会社で、当時では、今でいうベンチャー企業でした。都市と環境の両輪で始めた珍しい会社だったかもしれません。創業者たちは20代で国からも先生と呼ばれて都市計画を論じていたようです。都市マスタープランを作るというのが当時の主な業務内容で、かなり大きな金額でのお仕事だったようですが、今では同じ案件でも10分の1くらい(笑)。

少し、厳しいことをいいますと、日本のコンサルって文章を書くのがもっぱらですよ。年度末に、体を酷使して報告書を書いて商売している。でも、そればかりでは将来はないと思っている。すごく頭のいい優秀な人間が、素晴らしい文章を書いている、もう大きな金額にはならない。だから、そこにとどまっていなくて、ワンランク上にいこうという話をしてます。つまり文章での提案だけではなくそれを実施することによって、「誰かの手足」でなく「頭」になっていかなくてはいけない。だからエクスでは、発注元の問題はありますが、得手不得手の異なる他のコンサルなんかとアライアンスを組んで、一緒にプロジェクトをとって、プロデュース会社になりましようと言っている。

僕が横浜でやってきた**環境未来都市**⁴⁾ってのは、温暖化対策だけではなくて、健康福祉とか高齢化、経済、国際的なあらゆる面に取り組み、都市輸出も目指すものです。今年で丸5年なんですけど、これが来年度はSDGs 未来都市(仮称)ということになると思います。SDGs⁵⁾(Sustainable development goals)とは持続可能な開発目標として、去年の9月に国連が決めたもので、それを指して都市を作っていくというものです。今、内閣府が担当の環境未来都市推進協議会の中にもSDG s 検討会を作って、横浜市と北九州市が幹事になり、来年の1月にセミナーを横浜でやるつもりです。

エクスは前言の通り都市と環境の二本柱だが、それだけではだめ。しかし、各自自治体も、SDGsの17の目標値をすべて網羅して戦略を立て、全方面的に取り組むのは実質不可能ではないか、と思います。その都市ごとに、独特の"もと"があるはずなので、自治体ごとにストーリーを作るべきだと言っている。うちの都市はこんな都市だ、というのが、まちづくりの主張にしる政策展開にしるあるはずで、そのストーリー作りと施策の実践のお手伝いをエクスとしてプロデュースできれば、ということ今思っている。そうなってくるとエクスだけで

は到底できない部分を、コンサル同士にとどまらず、メーカーやゼネコンなどと連携していく必要があるだろうなあ。

▶北沢先生の思い出

- 信時さんから見て、北沢先生はどういう方でしたか？

僕がお会いしたときには病気が進んでらしたみたいだというのは後でわかったことだけど、それでもお酒が好きでね。いたずらっ子みたいなところがあって、なにせ明るくて人間的に面白いんですよ。横浜市で仕事していた時にも、仕事中に電話がかかってくる。「いまでも？ひま？」「ああ、時間ありますよ」「ねえちょっと来ない？」そうすると、役所ではなく役所の近くにある喫茶店の窓辺でパソコン開いて、いつも待ってるんです。会うと、「あのさあ…」から入って、「きみ、どう思う？」と、遊びの話でもないのに、密談めいてこっそり話すから、ああこやって知事とか市長にもあたっていったんだな、と思ってね。固くなくて、話を聞きたいなと思わせる。

写真とかでわかると思うけど、ちょいワル男風で、くそまじめでなくて、髪も巻いているし、いつも革ジャンを着ている。どなたかがおっしゃってたサングラスは見たことないけど、なんかこや…裏で活躍している人みたいな雰囲気だったね(笑)。でも人間ってさ、大通りよりも路地裏とかが好きじゃない。少し怪しいけど、そこに行くといろんな人がいて楽しくて、場末の飲み屋にいるんな情報や、濃密な人間関係があって…そういうのを想起させる。濃密なんですよ、お話が。本人は表通りの人なんですけどね。やっていることは大上段だし、肩書きも東大の教授だし。

だけど、例えば市長が入った役所の中の会議

——"この人とだったら楽しそうだなあと考えたから、一緒にやらしてもらったんです。"



の場でも率先して提案したり、新しい出会いを作っていくことにも積極的だった。プロジェクトを作っていくというのはそういうことだと思える。きれいな文章を書いたってそれ自体は何にもならない。裏には本当にいろんな作業があって、「こうしてもらいたい」と人に言うにしても、それがどれだけその人の得になるのが求められるのが世の中。だから大きなこと、きれいなことも言うけど、そういう部分にちゃんと目を向けて、裏と表をわかって動く先生だった。すべては理想に向けて、という感じですね。

- 「アーバンデザイナー北沢猛」という本で、信時さんの寄稿を拝見しました。北沢先生の、市民の幸せ、市民に根付いていくようなものをやらなければいけないという強い主張を引き継いでおられるのかなと思いました。

引き継いだというか、同調した。もともと自分の中にあつたものが、北沢先生と共鳴したと思う。だっていくらいいことを言っている、嫌な先生だったら一緒にやらないよね。この人とだったら楽しそうだなあと考えたから、一緒にやらしてもらったんです。

- 北沢先生は行政の目線をお持ちで、信時さんは民間に強い方だという、その目線の違いが刺激になったのですか？

北沢先生からは常に、お前は企業の人間、民間の人間を集めてこい、って言われた。当然育ってきた世界の違いによる人脈の違いを生かせるということだったと思うし、逆に僕は横浜の重鎮のメンバー、あと大学の先生とか、北沢先生の持つる質の良い人脈を紹介してもらったしね(笑)。そこは補い合ったかもしれないですね。歴史が違って経験も違う、人脈も違うけど、根本的な考え方・思想が共通していたからうまくやれたのかなあ。

- 影響を受けたことは何でしょうか。

北沢先生と同じにはなれないけど、近づけばいいという気持ちはあるよ。UDCの全国目標値100個だ、というのは僕にとっては遺言なので、目指していこうかなと。UDC initiativeもその試みの1つ。各UDCがそれぞれ生きていってくれないと、せっかく自治体のことを考えてやっているのに、いろんな理由で予算の切れ目が縁の切れ目になってしまったら、なんのためにやっているか分からないよね。でも甘えてられないので、1つ1つを自立させる方法について考えるようになったけど、そういうことを進めたいな、と思うようになったことそのものが、影響かもしれない。北沢先生のように表に裏に(?)動いて仕上げていく、みたいなことが必要だなあ、と思っています。

UDCを増やし繋げるのは、まさに新しい都市のシステムとして、必要だからなんですよ。上から下への一方通行ではないフラットな公民学の関係づくり、そしてネットワークです。これは再生可能エネルギーの形に近い。スマートグリッドとは、発電所がお互い補い合っって変動なくどこでも常に一定の量を配給できるように需給をコントロールするという。たとえば太陽光とか風力とかはそのままで地域の電力にはできない。これを地域に根付かせるために

は、スマートグリッドの技術が不可欠です。つまり、再生可能エネルギーを実社会で使うには、小さい発電所をいっぱい繋げるってことでしょ。いままでの電力ネットワークのように巨大な1つではなく、ある場所がだめになっても全体のネットワークは無事に保たれるレジリエンシーが備わる。BLCPというやつです。

そういう小さいものをネットワークしていく、小さな発電所のネットワークのような、都市経営の時代の1つの重要なノードになるのがUDCだと、そう考えている。国から言ったら自治体もそうだけど、先に言ったエリアマネジメント会社や、個々のUDCもそれぞれが独特であり、それぞれが小さなエリアにコミットしている。加えて、そのネットワークには個々の知恵が一同に集まって強くなる。生物も単一よりも多様な方が環境の変化に強いでしょう。

僕はCity managerになることが一生涯の目標でもあったけど、ちょっと早かったのか遅かったのか、現実に都市経営手法が変わっていく姿を見ていて、各地の都市のマネジメント、或いは、プロデュース主体としてのUDCの在り方を追求し、実践していくことが自分の人生の目標となっていくのかもしれないね。■

* * *



セグウェイを使った実験走行、UDCK

4) 環境未来都市：2010年6月に閣議決定された新成長戦略の21の国家プロジェクトの1つで、内閣府が主導している。環境、社会、経済という3つの側面を一定水準で満たしつつ、革新的な取り組みによりここから価値を創造する都市。横浜市を含む全部で13の都市が選ばれている。

5)SDGs:2030年までに達成すべき「持続可能な開発目標」。国連が定めた17の目標から成る。国での窓口は外務省。環境省は今年7月にステークホルダー会議を招集した。

関連書籍		
アーバンデザイナー北沢猛 秋元康幸 著	未来社会の設計 北沢猛 + UDSY 著	神山プロジェクトという挑戦 グリーンバレー+信時正人 著

信時さん、お忙しい中、沢山の時間を割いてくださり誠にありがとうございました。リアルタイムのわくわくする実務のお話から、「都市をデザインすること」への関わり方の幅広さを改めて教えていただいた気がします。次回の方もご紹介いただき、現在編集部で鋭意検討中です。どうぞご期待ください！

まちなかの足跡を探る ―喜多方から見えてくるもの―

Follow Footprints of Prof. Kitazawa in Kitakata



▲市役所通りを歩くメンバー。市役所通りは喜多方で北沢先生を振り返る際のひとつの鍵となる。

「地元」から見えてくるものがある―そう信じて編集部が訪れたのは福島県喜多方市。北沢先生が育ち、晩年に深く関わってきたこの町にはどんな手がかりが遺されているのだろうか？ 元喜多方プロジェクトメンバーであるD2 土井さん、そして地元の方々の協力のもと、取材を行った。

「訪喜」メンバーから



D2 土井 祥子

今回の取材旅で新しく知ったことがふたつありました。ひとつは、市役所通りの拡幅計画をめぐって地元住民の方々と行政当局が激しく対立した局面で、北沢先生がその間に立ち「円卓会議」を設け、沿道型街路整備の実施にこぎつけたこと。その場に立ち会っていた方々からのお話を聞くにつけて、感情がぶつかり合うような場でも穏やかさを失わず議論をリードしていかれた北沢先生は、「東大らしからぬ黒革ジャケットの先生」から、まちの方々にとって揺るぎない同志になっていかれたのだと実感しました。もうひとつは、最近酒屋の蔵元や老舗旅館で若い世代が次々と戻ってこれているということ。「人間」と「時間」と「空間」の「三つの間」をつなぐのがまちづくりだ、語っていらしゃったという北沢先生が、何より喜んでくださることはないかと思えます。そして今回、北沢先生のことも喜多方のまちも知らなかった修士の皆さんがこのまちと出会ってくれるお手伝いが多少なりともできたことで、また新しい「間」が生まれ、広がってくれたらとても嬉しく思います。



M2 黒本 剛史

一年ぶりのPJ 遺産めぐりは、濃霧とまちの熱気が立ち込める喜多方へ。蔵の街と名高い喜多方ですが、実は初めての訪問です。お世話になった北沢先生のことだから、と多くの関係者が集まり、思い出を語りました。夜の懇親会では、ラーメンと地酒とお話を饗宴に堪能しました。北沢先生と7年間のPJメンバー、そして今後も関わり続けた野原先生の功績が、都市空間や人々の中に強く刻まれていました。そして今回の訪問は、PJのあり方を考える機会でもありました。まちあるきやマップといったPJの手法の多くは、喜多方の頃に行われていました。都市デザイン研のまちづくり手法の中にも、確かに北沢先生は生きていたことに、気付くことができました。



M1 神谷 安里沙

東京から鈍行列車をはるばる乗り継いでやっとたどり着いた喜多方。当時のプロジェクトの先輩たちも最初はそうやって来ていたということを後で知り、東京を出た時から喜多方での足跡を辿る旅は始まっていたのだなあと気づきました。大学が喜多方と関わっていたのはもうずいぶん前のことなのに、今回お会いした当時の関係者の方たちの口から、北沢先生のことはもちろん、野原先生や研究室の先輩たちのことがつい昨日のこの様に語られ、その成果がずっと活かされていることに驚きました。先生やプロジェクトで大勢の学生が直接かかわっていた最盛期の様な強い繋がりはないのに、それを種としてこちらではずっと活動が続いて、新しい活動も生まれている。大学として地域に関わっていく意味の大きさを、身をもって知ることが出来た気がします。プロジェクトが終わってしまった今、学生が直接喜多方に関わることはないだろうと思いますが、喜多方から学んだことを活かして、現在参加しているプロジェクトの地域でしっかりと足跡を残せるように活動していきたいです。

取材スケジュール

1日目

- 7:00 東京発
野岩線・会津線経由で北上
- 13:00 喜多方到着
ラーメン屋にて昼食
- 14:00～ 芳賀英次さんとまちあるき
引き続き、小荒井まちあるき
- 17:00～ 「北沢先生を偲ぶ会」
居酒屋にて1次会開催
ラーメン屋にて2次会開催
- 22:00 笹屋旅館泊

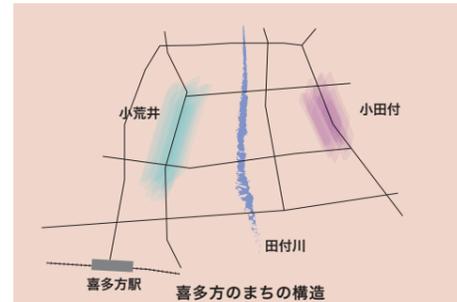
笹屋旅館十八番部屋
笹屋旅館は、北沢先生や喜多方プロジェクトの定宿で、この十八番部屋は北沢先生の定位置だったとか。先生を良く知る女将さん曰く、先生は宿ではおとなしかったらしい。

2日目

- 8:00 笹屋旅館発
ラーメン屋にて朝食
市役所にて小田付今昔物展 見学
小田付・小荒井まちあるき
- 11:00～ 星宏一さんへインタビュー
ラーメン屋にて星さんと昼食
三津谷登り窯見学
- 15:00 喜多方出発
- 22:00 東京着

会津の在郷町、蔵とラーメンのまち喜多方

喜多方市は、福島県の北部、奥羽山脈や越後山脈などの豊かな山系に開かれた会津盆地に位置しています。中世より在郷町として発展した商人のまちであり、市民の力によって成長してきました。まちは、中心を南北方向に流れる田付川を対称に、小荒井地区と小田付地区の大きく2つの地区によって構成されています。そして何よりも、喜多方は、北沢先生が幼少期から中学時代まで過ごされたまちです。北沢先生は、アーバンデザイナーとして再び故郷喜多方と向き合ったのです。

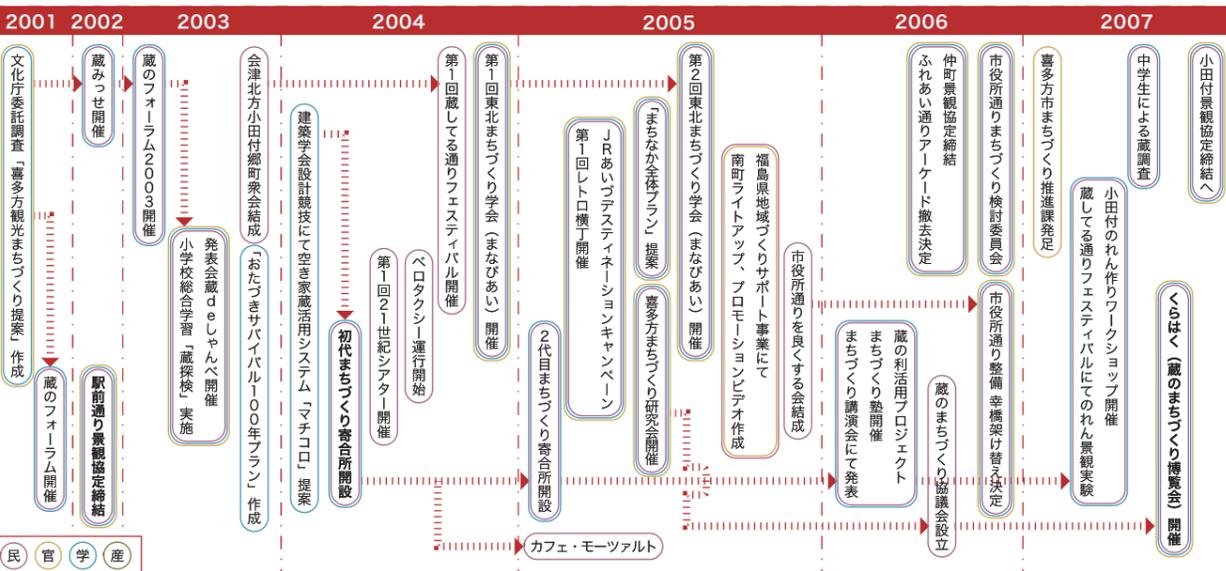


繁栄とまちづくりの歴史

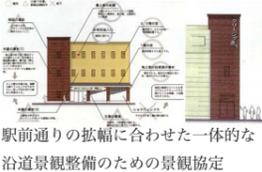
西暦	平安	安土桃山	江戸	明治	昭和	平成																		
	807年	1564年	1579年	1582年	1868年	1873年	1880年	1972年	1975年	1979年	1985年	1987年	1993年	1995年	2001年	2002年	2004年	2005年	2006年	2007年	2009年	2015年		
		定期市のはじまり	在郷町へ	蔵の建造	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	蔵の増加	
出来事			小荒井の町割り 六倉市が開かれる 三倉市が開かれる。	会津における熊野信仰の中心地。 僧「徳一」が唐臼寺を開き、会津に仏教文化が栄える。	戊辰戦争 小田付が焼かれる	喜多方大火 蔵の重要性が再認識される。 喜多方製糸工場の開業	喜多方大火 蔵の重要性が再認識される。 喜多方製糸工場の開業	金田美氏の蔵の写真展開催	NHK新日本紀行「蔵ずまのまち喜多方」放映	伝統的建造物群保存地区保存対策調査	歴みち事業開始	喜多方ラーメンのブーム	HOPE計画が策定される。	「蔵の里」が整備され、蔵が移築される。	「蔵の会」結成	文化庁委託調査「喜多方観光まちづくり提案」作成	蔵のフォーラム開催							

喜多方PJのあゆみ

文化庁委託調査をきっかけに始動した喜多方PJ。90年代から動き始めていた喜多方の蔵のまちづくりは、北沢先生を筆頭とする都市デザイン研究室チームが加わることで、様々な主体を巻き込み、加速していった。



駅前通り景観協定締結 (2002)



初代まちづくり寄合所 (2004)



くらはく (蔵のまちづくり博覧会) (2007)



空き蔵を改修し、一時的にまちづくり活動の拠点として開設されました。実際に空き蔵を使うことで活用可能性を地域に示し、新たな利用者を見つけることに成功しました。

民・官・学・産の多主体が行ってきたまちづくり活動の現況を整理しつつ、今後の方向性を考えるための博覧会。まちじゅうに展示を仕掛けるこの博覧会自体が「まちづくりの実験」でもありました。



▲駅前通り沿いにある丸見食堂。この基本設計は北沢先生によって行われており、建物の外壁には、北沢先生への敬意を表す記念プレートが掲げられている。

▼駅の観光案内所には、なんと10年前に喜多方プロジェクトで制作された「喜多方蔵之地図」が当時のまま貼られている。



駅前通り
喜多方駅から北へと伸びる駅前通りでは、都市計画決定に基づいて整備が行われ、幅員20mへと拡張された。拡張の際には、電線の地中化および、無散水消雪（道路の下に埋め込んだパイプに地下水を流して雪を解かす消雪方式）の導入が行われるなど、先進的な取り組みが実施された。また、道路整備と併せて景観協定が締結され、良好な景観づくりが行われている。駅前通りの整備経緯は、小荒井地区のふれあい通り整備に生かされている。

喜多方まちあるき MAP

北沢先生と喜多方の関わりを探るべく、編集部は喜多方まちあるきを実施した。県が整備に大きく関わった駅前通りふれあい通りでは、芳賀さんに案内していただいた。



元喜多方建設事務所長 芳賀 英次 さん



小荒井地区
小荒井地区には、ふれあい通りと呼ばれる通りが南北に走っており、多くの店舗が建ち並ぶ。ここにはかつてアーケードが存在したが、老朽化や景観上の問題から、2008年にすべて撤去された。アーケード撤去の際に積雪対策として無散水消雪が住民の強い要望で導入されたほか、駅前通りと同じく電柱の地中化や景観協定の締結も実施された。こちらの通りも拡張が計画されていたが、駅前通りで道幅を拡張すぎたという反省から、拡張については見送られた。



市役所通り
▼拡張済の区間（写真手前）と、拡張未実施の区間（写真奥）との境界。写真手前部分は幅員20mにまで拡張されており、歩道も非常に広く採られている。



▲景観協定によって統一感が保たれている町並み。道路整備以降、新しい店も入ってきており、ふれあい通りは賑わいを呈している。

▼ふれあい通り沿い蔵庭。こちらの蔵庭では、トランスを目隠しするための工夫が為されている。

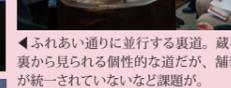


▲景観協定を締結したエリアから一歩出ると大きな看板を出した自動車販売店が出現。設計まちづくりチームが設計を手掛けたラーメンミュージアム&ラーメン神社。



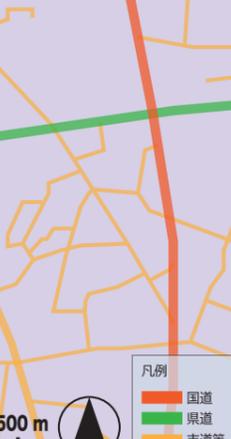
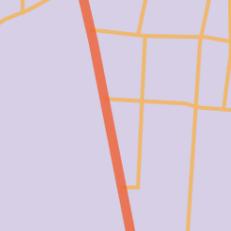
▼アーケード撤去にあたって、いち早く店前のアーケードを取り払った茶舗・島慶園を訪れ、店主の長島さんからお話を伺う。

▲建築事務所「設計まちづくり」を訪れ、喜多方でまちづくりを行う高橋さんから、町についてお話を伺う。



▲金田洋品店にて、蔵を記録し続けた金田実さんの本を見せていただいた。

▼若喜商店で冠木さんに挨拶を行う。こちらも登録有形文化財だが、道路拡張問題に揺れている。



▲同じく登録有形文化財である三十八間蔵。38間にわたって複数の蔵が連なっていることからこう名付けられた。

▼南町2850プロジェクトによって修復された蔵。地元の高校生がWSを重ねた結果、絵本の蔵へと生まれ変わった。



▼蔵を活用した酒店・和歌蔵。店主の量さんにはインタビューをお願いした。

▼歴史的価値も認められる長屋。前面の国道の拡張が道路に立退きを迫られることになる。



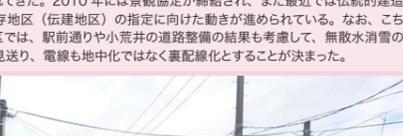
▲古い建物が残る小田付のメインストリート。地元の活動の結果、道路の緑石の撤去が実施されている。

▼古くからある道沿いには、水路が残されている。

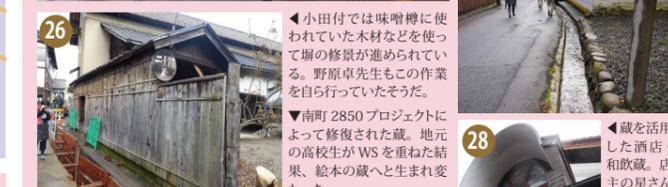


▼小田付では味噌樽に使われていた木材などを使って塀の修繕が進められている。野原卓先生もこの作業を自ら行っていたそうだ。

▲蔵を活用した酒店・和歌蔵。店主の量さんにはインタビューをお願いした。



小田付地区
田付川を挟んで小荒井地区と反対側に位置する小田付地区には、蔵や古い町並みが比較的良好な状態で残されており、景観の保全や蔵の利活用の推進などが進められてきた。2010年には景観協定が締結され、また最近では伝統的建造物群保存地区（伝建地区）の指定に向けた動きが進められている。なお、こちらの地区では、駅前通りや小荒井の道路整備の結果も考慮して、無散水消雪の導入は見送り、電線も地中化ではなく裏配線化とすることが決まった。



芳賀英次さんの随想録

The Essay Written by Eiji HAGA



芳賀 英次さん

福島県の土木技師として北沢先生や都市デザイン研と深く関わった方。特に喜多方建設事務所長時代にまちづくり構想の策定や道路整備をリード。



まもなくお話し中の様子。駅前通りにて。

喜多方に来て最初にお会いしたのは元福島県職員で、喜多方建設事務所長を歴任された芳賀英次さんだった。北沢先生を人生の師と仰ぎ、先生に対して人一倍強い思いを寄せる芳賀さんだが、ここでは北沢先生が亡くなった翌年の春に芳賀さん自らが書かれた随想文を紹介した。

「芳賀さんは、親友ですよ。」

(2010年3月 芳賀英次さん執筆、一部変更)

私と先生との最初の出会いは、2004年7月18日、初代まちづくり寄合所の開所式の日だった。折しもこの日は、会津地方の集中豪雨で、喜多方市内の河川の堤防が何カ所か決壊し、何十年ぶりかの大災害で、日曜日であったにもかかわらず、喜多方建設事務所は、てんやわんやの状態だった。本来であれば開所式に出席する予定だったが、そういう状況だったので、私は災害復旧業務の担当ではなかったが、建設事務所管内のパトロールの役目を任され、その途中で、初めて先生に会った。その時の私の格好は、ヘルメットに長靴、垢抜けしない県の作業着を着た工事現場の「おっさん」であり、初めて会うというのに大変失礼な出で立ちだった。

その時の先生の印象は、何となく年齢よりは上に見えたと、大変失礼な言い方をすれば、この方が東大の助教授なのかな…? というような感じだった。ただ、名刺交換した直後、間髪を入れず、「駅前は、どうなっているのかね?」と鋭く質問され、予想もしていなかった事態に、しどろもどろになったことを憶えている。記憶力の極めて悪い私にしては、先生との最初の出会いは極めて強烈な印象があり、今でもそのときの状況が目には浮かぶ。まさにこの時がその後の私の人生を変えてしまった、最初の衝撃的な出会いだった。

* * *

振り返ってみると、初めて先生に会って以来の5年間は、勝手な言い方をすれば私が独占したように思う。一緒に仕事をした時間、酒飲み等々いざれをとっても私が一番時間を共有したような……。それこそ先生が命がけて毎日を生きていた貴重な時間を一緒に過ごしたことは、何物にも代え難い貴重な財産である。

喜多方建設事務所への転勤が無かったらたぶん先生には会っていなかったと思う。喜多方への転勤が決まった時、2003年3月であるが、ほんとうにがっかりした。理由は単純で、郡山の自宅から遠いということと、そして初めての単身赴任を強いられるということだった。「会津の三泣き」と言うが、まさにそのありがたい経験をし、そして、北沢猛教授という人生の「師」に出会っ

た。喜多方の皆様にもほんとうにお世話になった。

もし私が同じような病魔に犯され、余命3年と宣告されたとき、先生のような生き方が自分にもできるのかと問いたしてあげると、その自信は全く無い。やはり、先生は素晴らしい。

それから、朝出勤してから一番にする先生へのメールは私の日課になっていた。それができない今はとても寂しい気分。

「まちづくり」の「ま」の字も知らない、ど素人の私、勿論、「都市デザイン」など勉強したことも無い一地方公務員。大学の教員でも、後輩でもない私をこんな私を根気よく、指導してくれ、ある時は、叱咤激励、ある時は慰め、ある時は一緒に怒り、仕事上だけでなく、ほんとうにお世話になった。

個人的な話になるが、郡山での酒飲みになると「今日は奥さんは来ないの?」と妻のことまでいつも心配してくれて、先生の人間的な優しさには、ほんとうに心打たれた。また、一昨年長男を亡くしたわけだが、その告別式にも会葬してもらった。ほんとうは郡山まで来てもらえるような状況では無かったが、ほんとうに申し訳無かった。

実は、長男の命日は、6月11日なのだが、先生が逝去したのは12月22日、数字が息子の丁度2倍になっている。先生の誕生日は忘れてしまったが、命日は、絶対に忘れられないと思う。これも、ただの偶然とは、思えない。

* * *

長くなってしまったが、最後に、私が先生から頂戴した、ありがたいお言葉、私はご遺言だと思っているが、確か二年くらい前だったか、喜多方での何かの懇親会が終わり、二次会へ移動する途中だったと記憶しているが、何かの話の中で、「芳賀さんは、親友ですよ。」身に余る光栄な言葉で、涙がでるほど、嬉しかったのを憶えている。そして、昨年3月、県庁への異動が決まった時に、「芳賀さん、役所の中では絶対に目立たないように……。」元地方公務員であった先生ならではの含蓄のある言葉だった。私は、この二つの言葉を胸に、毎日、仕事に励んでいる。■

星宏一さんインタビュー

The Interview with Koichi HOSHI



星 宏一さん

小田付で明治期の倉庫蔵をワインの蔵に改装。町衆会をはじめNPOまちづくり喜多方、三津谷の煉瓦登り釜再生などさまざまな活動を中心に担う。

訪問2日目には、「和飲蔵」の店主であり、小田付におけるまちづくりの中心メンバーの一人である星宏一さんにインタビューをお願いし、様々なお話をお聞かせいただいた。星さんにはインタビューの後に三津谷登り窯まで連れていただき、喜多方の蔵やまちなみを支える煉瓦に触れた。



インタビューの様子。蔵の2階にて。

-まず、北沢先生との出会いについてお聞かせください。

北沢先生に初めて会ったのは2003年だった。それまでは店をやってひとりで楽しんでいましたが、北沢先生が喜多方に来てからいろいろと刺激を受けて、2003年に小田付郷町衆会を立ち上げた。翌年の2004年にはまちづくり寄合所が小田付にオープンしたのだが、北沢先生とまともにお話できたのはそのときが初めてかもしれない。先生は「喜多方にはこれだけ蔵があるんだから、蔵を資源として使わない手はないでしょ?」ということを実際の市長を含めいるんなりに説いていたが、それが印象に残っている。

-これまでに小田付ではどのようなことがなされてきたのですか。

2004年以降、各種社会実験や高校生を巻き込んだ取り組みなどを重ね、蔵のまちづくりに向けた気運を醸成することを目指してきた。そうした活動が実を結び、2010年には景観協定が締結されている。

北沢先生が亡くなってからは、中井祐先生や西村浩先生に関わってもらいつつ、ブロック塀の修景や蔵の修復など、町の中の景観の向上と蔵の利活用に焦点を当てた取り組みを進めている。

-北沢先生と関わられたなかでどのようなことが印象に残っていますか。

北沢先生とはお酒を飲みながらいろいろお話したが、先生の晩年にはブータンのGNH(=国民総幸福量)の話をよく聞いた。でも一番強く心に残っているのは、以前に北山利彦先生から伝えた北沢先生の言葉かな。「人間、時間、空間の3つを結ぶのがまちづくりで、その3つの「間」を繋げることで幸せがつけられる」と

いうまちづくりのシンプルかつ美しい定義に出会い、凄いて思ったんだよね。大事なのは金を稼ごうとか経済的に成長しようということではないということを教えてくれて、私の価値観を変えてくれた。

それはさておき、喜多方のひとが北沢先生にいちばん恩義を感じているのは市役所通り問題かもしれない。当時、市役所前の道路の拡幅を巡って住民側と行政側とで対立してしまい、本当に話し合いが決裂しそうなくらい険悪な雰囲気になっていた。そこに中立的な立場として商工会議所、さらに仲裁役として北沢先生に入ってもらったのだが、そのときに北沢先生は、テーブルのこっち側とあっち側という区別を取り払って円卓会議をしようと提案し、テーブルを文字通り円く囲って穏やかに場を取ってくれた。結果として市役所通りの拡幅は道路周辺の区画整理と併せて行われ、今の状態に落ち着いた。20mにまで拡幅する必要があったかという議論は今でもされているが、この市役所通り問題が決着したのは本当に北沢先生のおかげであり、あの場を見事に収めてくれた先生には足を向けて寝られない。

-これからの喜多方のまちづくりには何が求められているのでしょうか。

本当に蔵や町を守るには、素材や伝統工法、それに職人が継承される文化をつくらねばならない。北沢先生は、職人を「準公務員」にすればいい、ということをよく言っていたが、最初のうちはやはり官費を投入して職人を育てなければならぬと思う。せつかく市が甲斐本家を買い取ったことだし、そこを練習場として蔵の修復や保全を担う職人を育成し、喜多方で育った職人を全国の蔵へ出張ぎとして派遣するという仕組みをつくりたい。

それと今、小田付では伝建指定の話が進んでいるが、伝建にただで人が来るようになるわけではない。今好調な喜多方の造り酒屋のひとたちに観光蔵をしっかりと整えてもらって町の回遊性を高めつつ、空き店舗をものづくりにこだわるような人たちで埋めるとのが理想的ではないだろうか。今の時代はネット販売が活発になっているが、そのベースとなる実店舗の集合体のような町になるといいなと思っている。

あと、伝建地区に指定しようとしているエリア内に途中まで拡幅工事を進めてきた都市計画道路があり、沿線に伝建調査の対象にもなっているような保存価値の高い建物が数棟残されていて、これらがある種対立している状況が発生している。これについてどう折り合い付けるのか、市のなかで方針が定まっていない。

市役所通りの方でも若喜商店の辺りなど、まだ解決されていない箇所があり、解決が求められるが、難しい局面にある。それを決着できる人材が必要で、できるならもう一度北沢先生に降臨してもらって「仲裁」をしてもらいたい。

■ (聞き手：D2 土井・M1 松田・神谷・田中・中村 編集：M1 中村)

登り窯を訪れる

インタビュー後に訪れた三津谷登り窯では、喜多方煉瓦會の加藤裕之さんから詳しい説明をいただいた。煉瓦はまちなかの蔵や土木構造物に使われるなど、喜多方のまちを支える重要な素材であり、それを守るためにこの窯を活用していくことが必要だという。



▲窯の内部に入る編集部員

▲加藤さんによる説明

北沢先生を偲ぶ会

Night Party — Recollect Prof. Kitazawa

喜多方の夜は、冠木紳一郎さん、長島慶司さんの協力のもと「北沢先生を偲ぶ会」を開催し、北沢先生とご縁のある方にお集まりいただいた。会は北沢先生の人物像や功績、それに喜多方のまちづくりについてなど、様々な話題で盛り上がった。



◆北沢先生との思い出

伊関：先生はお父さんの仕事の関係で小中時代を喜多方で過ごしていた。当時は直接面識があったわけではないが、北沢先生は学校の後輩にあたる。先生は昭和電工の社宅に住んでいたのだけど、社宅に住んでいる人という皆様ちょっと都会的な雰囲気だった。

長島：東大の教授というどうしてもとっつきにくい感じがしてしまうが、先生が喜多方育ちだと知るとやっぱり話しやすかったね。

冠木：先生にはおそらく喜多方に育てられたという意識があって、行政も民間もあまりお金を出さない中で、ボランティア的に関わってくれていたというのはあるかもしれない。

長島：先生はほんとにまちの人のことをよく知っていて、まちづくりを進めるにあたっての人選についても真剣に考えてくれていた。先生は場のとりまとめが上手で、シンポジウムの際にみんなが思いに話したものを最後にきれいに纏めてくれる、そうした姿が印象に残っている。

冠木：個人的な思い出としては、市役所通り拡幅に伴う立退きに先だって若喜商店の建物を登録有形文化財にしたときかな。その登録の直後に北沢先生が現われて、先生ならではの行政/学者両方の目線からのアドバイスももらった。市役所通り問題を巡っては2005年に市役所通りをよくする会という組織が結成されるが、先生はそうした種を喜多方に蒔いてくれた。いろんな人がバラバラにまちのことを考えていたのが、このあたりから纏まり始めたね。

でもまさか北沢先生が病気だったのは誰も知らなかった。一度、体調が悪いから和室で休ませ

てくれ、と言われたことがあっておかしいなと思ったことはあるし、酔ったときに「俺、癌なんだよね」と言われたような気もするけど、その時にはまさか病気だとは思わなかった。9月から10月に北沢先生が臥せていることを喜多方の人から知らされて、11月にお見舞いに行ったりしたね。

矢部：別宅にいたんだよね。すぐ治して帰るよ、という感じだったのに。

◆北沢先生が喜多方に遺したもの

冠木：先生の功績は市役所通りも大きいけれど、なにより小田付のまちづくりの形をつくったことだと思う。伝建の話も北沢先生が関わったことだった。

矢部：小田付はふれあい通りの影響を受けて景観協定から伝建へと進んでいった経緯がある。その頃にはもう北沢先生は直接的には関わっていないんだけど。

冠木：北沢先生は駅前通りから関わっていた。先生が喜多方で関わっていたのは2001年～2009年だったが、存在感は大きかったね。

長島：東大の院生は2007年に活動を終えたけど、今は野原卓生つながりで横国大の学生が卒論調査で来るなど縁が続いている。

冠木：ふれあい通りのアーケード撤去は北沢先生とは関係なかったかな？

長島：アーケード撤去は先生と直接的には関係ない。でも撤去のための調査を先生たちにやってもらっていた。撤去したほうがいいということは日頃から言われていた。

伊関：撤去された直後はちょっと異様に見えたが、やっぱり蔵があることだし、蔵を見せるには撤去したほうがいいなってなったね。

参加メンバー

順不同



冠木 紳一郎さん
ふれあい通りと市役所通りの角に位置する醤油・味噌醸造元の当主。特に市役所通り拡幅の議論で北沢先生と深く関わる。



長島 慶司さん
ふれあい通り仲町商店街の老舗茶舗「島慶園」当主で、いち早くアーケード撤去を実施。景観ガイドラインの策定・運用にも中心的に関わる。



矢部 善兵衛さん
喜多方随一の呉服問屋であった「大善」家の当主。32畳の蔵座敷は喜多方を代表する蔵のひとつ。小田付町民衆会の初代郷頭。



伊関 聡さん
小田付郷町集会所の郷頭。電気設備の技術者でもあり、デザイン研が設置した喜多方分室（「まちづくり寄合所」）でもお世話になる。

矢部：修景まで面倒見てくれたんだよね。

長島：2008年に纏めてアーケードを撤去して、街路灯の整備、ファサードの統一などの修景を行ったが、撤去後の方向性については野原先生たちが描いてくれた。だから修景の方向を間違えずに済んでいる。北沢先生からアーケードを撤去した後どうするかについては直接聞いてはいないが、撤去後のビジョンは野原先生にしっかりと伝わっていたのだと思う。

矢部：市役所通りはどうだったのかな？

冠木：行政側と、市役所通りをよくする会の顧客である星さんたちが対立していたのだが、その間に立ったのが北沢先生。残地をまとめて整えて、皆が残れる仕組み作りをしようということを決着したが、あの手法はやはり行政にいた人でないと見だせなかったと思う。

矢部：話し合いの仲裁のためにも市役所に来ていたよね。先生が奥さんの運転する車から「よう」って現れた姿を憶えている。

◆これからの喜多方について

冠木：北沢先生の働きかけによって、前市長の頃には役所にまちづくり推進課が設けられていたが、合併や市長の交代を経て部署の見直しが行われなくなってしまった。背景には郡部の町村が一緒になったことがあるかな。

長島：合併して以降、旧郡部への配慮からまちなかへの投資が薄まっている。県の事業も終わって、経産省の補助金も切れているので、これからは市に頑張ってもらいたい。

伊関：伝建に関していうと、今まさに市が進めてくれている。都市計画道路との関係で予定が遅れているので、そのあたりの調整などを市には頑張ってもらいたいね。■

山本裕司さんの随想録

市としても個人的にも北沢先生に大変お世話になったという市役所職員の方山本裕司さんにもお越しいただいた。山本さんも会に参加していただく予定であったが、ご予定の都合で会とは別に時間をいただき、お話を伺った。山本さんには後日に随想文を寄稿いただいたので、そちらを紹介したい。



山本 裕司さん
喜多方市都市計画課長として特に市役所通り拡幅の議論の過程を北沢先生と共にした方。現・山都総合支所長。



(2016年12月 山本裕司さん執筆、一部変更)

◆北沢先生と出会ったきっかけ

最初に北沢先生に会ったのは、総務課の秘書係長をしていた2001年に、市長の日程調整の中で、北沢先生との面談の日程が設定となり、先生が喜多方市役所の秘書室に来た時でした。市長と面談する前、秘書室で待っている時に、少しお話をさせてもらいました。

東大教授ということで、どのような方が来るのかとドキドキしていましたが、会ってみると、とても穏やかで優しい方で、話の内容もとてもわかりやすく、また話し方も柔らかかったという印象が強く残っています。

後に都市計画の仕事に戻った時も、技術の事や制度の事など、とても丁寧に説明をしてもらい、私たちの目線でお付き合いさせてもらったと、心から感謝しています。

◆北沢先生の功績

北沢先生には本当にお世話になりました。喜多方市の「まちづくり」「都市計画」は、先生のおかげで、単なる国の補助基準に合致させるという整備手法から、洗練された「アーバンデザイン」でありながら、地元の人たちに愛され、喜多方らしさにあふれるまちづくりに大きく変わったと思います。

今行われているまちづくりは、全て北沢先生が中心となって話し合ったことが基本となっていると言って過言ではないと思います。その中で、私が大変お世話になり指導してもらった思い出深い事業をいくつか紹介します。

まず初めに、都市計画道路 坂井四谷線（＝市役所通り）ですが、交通量や路線の格付けから幅員20mで都市計画決定がされておりましたが、沿線のコミュニティ形成等の観点から、これだけの幅員が必用なのだろうかという大きな議論となりました。なかなか明快な理論的合意形成が難しかった時に、北沢先生が中心となりワークショップや懇談会を何回も何回も行って、結果して、その当時は全国でもまだ事例が少なく（東北地方ではまだ前例がない）「沿道整備街路事業」を導入しながら、沿線のコミュニティ形成が図りやすい街路整備を行うことで合意形成がなされ、幸町工区（幸橋～市役所前）を工事着手し、現在その西側の御清水工区を施工しているところです。

二つ目は、景観計画とサイン計画の策定です。これは、将来の喜多方の景観形成の基本となる重要なものであります。景観形成は、多くの人を納得させるための、洗練されたセンスや感性と裏付となる高度な理論が必要だと思えます。

さらに、今回は景観計画策定より先に、まち中のサイン整備に国

の補助が採択となり、サイン計画を先に策定しなければならなくなっていました。しかし、北沢先生の景観計画を視野に入れたサイン計画策定の指導により、方向性が統一された計画策定並びにサイン整備になったと思います。北沢先生がいてくれなければ、まとめきれなかったと思います。

もう一つは、喜多方駅前広場の整備です。駅前広場は平成16年に都市計画決定を受けており、JRで喜多方においてになるお客様にとっては、喜多方の玄関口であり交通結節点という重要な施設ですが、駅前地区との連携や景観等多くの検討課題があり、なかなかまとめることができておりました。

平成16年、駅前を何とかしなければという機運が高まり、再再度、駅前整備計画に着手しました。その時、東京大学の北沢先生の研究室にお伺いし、基本的な事をいろいろ丁寧に教えてもらいました。

研究室に入ると先生は、「よく来たね。今日はどんな話？駅前広場か。どれどれ……。」と、話をしてくれました。とても天気の良い日で、明るい太陽の光と、心地良いような先生の穏やかなお話、説明の中でとても充実した時間が過ぎていったことがとても強く印象に残っています。

思い起こせば、もっと多くの事が思い出されます。私ばかりではなく、その当時、喜多方のまちづくりに真剣に取り組んでいた皆さんが、北沢先生の人柄に感銘受け、多くの教授をもらったことが礎となって、今、まさに北沢先生を中心に皆さんで話し合ったことが、喜多方市のあちこちで具現化されています。

◆北沢先生との思い出

北沢先生はとても忙しかったので、少しでも時間節約のため、車で途中まで迎えや、お送りをしました。

一度、先生が田村市での仕事があり、喜多方に来てもらえるのであればその次の日だけしかない、ということがありました。でないと、海外出張も含め、しばらく喜多方に来てもらうのが無理でした。それではということで、朝早く三春の宿舎まで車で迎えに行き、喜多方市役所で午前一つ、午後二つ、会議をお願いし、夜は懇談会で懇談してもらい、それから車で猪苗代駅までお送りし、JRで帰ってもらうという、とんでもないお願いをしました。

それでも先生は、「送り迎えさえしてもらえれば、時間のある限り会議はいくらでもできるから。」と、穏やかな口調で言ってくれました。本当に、タフだなと思いました。しかし、この時すでに病気があったということは、本当にずーと後になってから分かったところでした。先生には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。■



1次会の最後に撮った1枚。1次会からは、まちあるきの際にお世話になった芳賀さん及び設計まちづくりデントの高橋梢さん、そして市議員の山中雄志さんにも駆けつけていただいた。

夜の宴にて

北沢先生を偲ぶ会、「続きはお酒を飲みながら。」という冠木さんの提案を受け、途中で場所を移して居酒屋へ。2次会は皆でラーメン屋に入るのが喜多方スタイルのようだ。学生数人対地元の方数人というメンバーでの懇親会は新鮮で、あたたかも喜多方プロジェクトを体験しているかのような楽しい一夜だった。喜多方の皆様、ありがとうございました。



1次会のようす



2次会のようす

お題：
北沢先生についてひとこと

酒宴のあと、「北沢先生について」というお題でコメントをいただきました。

恐れ多い

長島慶司

北沢先生、
100年先を
目切つて素直に言わせて。
ありがとうございました
冠木伸一郎

先生が元点です。

会津北条小田村総領家会
緑頭 伊関聡
町づくりの吉田松隆先生、ありがとうございました
定部善長衛

先生のいたタネは確実に
実りをたしてはいますよ!!

喜多方にもよにも!

山中雄志

「芳賀さんは親友ですよ。」
「お祭り」「地酒」「和菓子」
良い「まち」の条件。

芳賀英次

✧ 編集後記

田中 雄大
訪喜初夜、美味しい日本酒を片手に、様々なお話を聞きました。中でも、育った地域が、地域の文脈が、想像以上に影響力を持ち、人を築くことがとても印象的でした。一現首相は山口県出身（長州藩）だが、先のサミットで喜多方（会津）の酒を出したんだ。一約150年前、日本は一つの国でなかったことはもちろん知っていましたが、長い年月を積み重ねてきた上に今があるということ、その土地の人の言葉に気付かされました。

松田 季詩子
今号の2つの取材では、学生という立場に甘えて貴重な経験をたっぷりさせてもらったと同時に、世界の知らなさも痛感しました。私にとっての回想とは、いまだ昔の狭い視野を浮かび上がらせるものです。でもお会いした皆さまは、「7年前」を過去でもあり目標でもあるものとして、常に今と照合しつつ先へと進んでいらっしやいました。将来、過去の未熟さを笑っても、過去に笑われない人間になるということも意識したいです。

中村 慎吾
今回の取材で一番印象に残ったのは、喜多方で多くの方から聞いた「先生には恩があるから」という台詞だった。おそらく喜多方限定の台詞ではないだろう。地元には北沢先生に触発された人が大勢いて、これからのまちづくりの担い手として活躍している。片やUDCのほうは全国に広がり、組織として一定の型を確立してきている。北沢先生が生前に蒔いた種は長い時間のなかで後継者たちに引き継がれ、実を結びつつあるようだ。

Information

1月の予定

- 1/6 研究室会議
- 1/6, 20 Urban Film Night
- 1/12 としと一く
- 1/17 修士論文題目提出
- 1/24 修士論文提出
- 1/30-31 修士論文審査

来年も都市デザイン研マガジンをよろしくおねがいします。